読んで考えるトラブル対応シミュレーション

人事労務のリスク管理メモ

いま職場で起こっている？リアルなトラブル事例

２０２２年　７月号

●人事部付の危険人物

「Ａって、何者なんですか？」
　新入社員のＢは、職場の先輩であるＣに、率直に聞いた。
「私もよくわからないんだけど…」
「そうなんですか！？」
「前職は、どこかの上場企業の役員だか、上の方の管理職だったとか…」
「自分でいつも自慢してますよね…ホントかどうか怪しいですけど」
「これまでにも問題があったし…」
「今だって問題です。仕事を勝手に仕切ったり…それにいつも誰かを怒鳴ってて…」
「実はね、Ａが原因で、これまでにも何人も辞めてるの」
「やっぱり…Ａがいるだけでもストレスですから。それなのに所長は、あんなに怒鳴ってるＡが目の前にいても、見て見ぬふりでしょ」
「Ｄ所長は、いつもそう。私がずいぶん前に、何とかして欲しい、ってお願いした時も、『まぁ、みんな仲良くやろうよ』、だって」
「でも、ということは、Ａは、Ｄ所長の部下、になるわけか…？」
「うーん…そうなるのかな…」
「ちょっと試してみます」
　とＢが言ったが、先輩のＣには見当もつかず、心配そうにＢを眺めた。
「おい、Ｂ、お前は何で昨日休んだんだ！無断欠勤だ！」
「Ｄ所長に伝えてますが…」
　Ａの顔がみるみる赤くなった。
「俺に連絡がなければ無断欠勤だ！」
　ＢはすぐにＤ所長に、Ａから無断欠勤だと言われたと伝えたが、Ｄは、
「一応、Ａさんにも、ねぇ…」
　などととぼけるので、Ｂは所長にかみついた。
「私は所長に伝えたのに、無断欠勤になるんですか？」
「いや、その、無断欠勤には…」
「なるんですか？ならないんですか？どっちなんですか？」
「な、ならない、なぁ…」
「無断欠勤ではないんですね」
「そんなに私をいじめないでよ」
「私たちは、毎日Ａから怒鳴られているんです！」
「…」
「無断欠勤ではないですね！」
「…」
「人事に確認してもいいですか？」
「ちょっと待ってよ…ウーム…」
「無断欠勤になる訳がないですよね、Ｄ所長！」
「そ、そうだ…」
「最初から、そうはっきり言ってくれればいいんですよ…まったく、もう…」
　Ｄ所長は弱り切った眼をしていた。
「Ａさん、無断欠勤ではない、とＤ所長が言ってくれましたが」
　Ｂから唐突にそう言われ、何の話か見当がつかず、ポカンとしていた。
「この間、私のことを、無断欠勤だって…」
「あーぁ、あれね…」
　というなり、Ａは記憶を取り戻した。Ｂは自分の言ったことにケチをつけている、そう思うと火が付いた。
「貴様…」
「Ｄ所長に伝えてたんですから、無断欠勤になるはずがないんです」
「おい、誰に向かって口を利いてるんだ」
「Ａさんですよ」
　Ｂはしれっと答えた。
「あのな、俺は…」
　と言いかけて、Ａは次の言葉を飲みこんだ。あぶない、あぶない…Ｂめ、ふざけやがって…俺が必ずクビにしてやる…その前にＤだ…
　翌日Ａが出社すると、職場の様子がおかしいことに気づいた。Ｄ所長がいない…Ａは先輩のＣに小声で聞いた。
「所長、お休みですか？」
「そうみたい…でも、私たち、それどころじゃないみたいよ」
　そこにＡが肩を怒らせて登場した。
「みんな、よく聞け。今日から俺が所長だ。俺の指示に従わないものは、即懲戒処分だから、覚悟しろ」
「…（何様のつもり！？）」
「おい、Ｂ。まずはお前が懲戒処分第一号だ」
「はぁ…！？」
「なんだ、その態度は！」
「何で懲戒処分なんですか？」
「無断欠勤だ！」
「無断欠勤！？」
「そうだ。俺に連絡せずに、勝手に休んだ」
「…（頭おかしいんじゃないの）」
「ざまみろだ。へへ…」
　Ａには、いったい職場で何が起こったのか理解できず、頭の中が混乱していた。一方、ちょうどそのころ、Ｄ所長は退職届を手に、Ｅ人事部長の前でうなだれていた。
「どうしましたか？」
「こ、これを…」
「唐突にこのようなものを見せられても…」
「申し訳ありません！！」
「話してもらえますか？」
「私は、とんでもないことを…」
「…」
「実は、Ａなんですが…」
「Ａが、どうかしましたか？」
「配属当初に、面談をしたんですが、その時に、あまりに年配だったので、何かの間違いか、と思ったのです」
「不審に思った？」
「ま、まぁ、そうです。い、いえ、それよりも、社長の判断での配属とのことでしたので、どういうことなのか、私の後任なのかと、ですが…」
「年を取りすぎている…」
「…」
「率直に話して下さい」
「自分は副社長で、私の上司だと…」
「Ａがそう言ったんですか？」
「はい」
「はぁ～…あきれてものが言えない」
「ですが、もっと重大な、聞き捨てならないことが…」
「聞き捨てならない！？」
「Ａは、裏社会とつながりがあると」
　Ｅ人事部長は頭を抱えた。
「本当にそう言ったんですか？」
「絶対に誰にも話すな、社長以外に誰も知らない、と」
「それで、Ａのやりたい放題を黙認し続けた？」
「…はい」
「まったく、困った人だ」
「本当に、申し訳ありません」
「あなたのことじゃありません。Ａのことですよ」
「え、えっ…」
「状況は分かりました。退職届はしまってください」
「ですが、私は…」
「明日はきちんと出社することです」
「そ、そんな…私は、Ａに殺され…」
「ません！」
「でも…」
「何も心配いりませんから、これまで通り業務を続けてください」
「ですが…」
「申し訳ないけれど、これ以上お話しできません。ですが、もう何も問題はないので、安心して。職場ではいつも通りにしてください」
「…」
　Ｄはキツネにつままれたように、状況を飲み込めずにいた。
「社長、Ａを何とかしてください」
「Ｅ人事部長の、巧みな采配で…」
「無理です！」
「…」
「社長の、唯一無二のご親友だそうですが、Ｄ所長に、裏社会とつながりがある、などと脅したとあっては…」
「ま、待ってくれ」

「やはり、説明が必要では？」
「ウーム…」
「明日はDに、きちんと出社するように伝えてあります」
「それは、…当然だ」
「ですが、Aがそのままでは…」
「わ、分かった…Aは異動させる」
「それで安心しました」
「で、君にAの面倒を…」
「えっ、…それは…」
「受け入れ先が見つかるまでの、わずかな期間だよ」
「…」
　予測はしていたが、結局ババを引くのは自分か、とEは観念した。
「社長から直々の呼び出しとは、うれしいね」
「こっちはちっともうれしくない」
「なんだ、怒ってるのか？」
　F社長はAをにらみつけた。
「お前は、くだらん嘘でDを脅して、何を考えてるんだ！洒落にもならん」
　Aはギョッとして背筋を正した。
「な、何のことだか…」
「とぼけるな！俺の立場も考えろ」
「お前が社長なんだから、俺は副社長だろ、な、そうだろ」
　F社長は天を仰いだ。
「それをDは、俺のことを、後任か、とぬかしやがった。冗談じゃない。俺は副社長だ」
「それでDを脅して、怒鳴る、喚くのやりたい放題か？」
「まぁ、ストレス発散、だな」
「いいか、これが普通の会社なら、お前は即刻クビだ」
「確かに、普通ならそうだろ。だが、俺は副社長だ」
「お前の勘違いも、そこまで行くとむしろ感心するよ」
「Fからそう率直に褒められるとは、うれしいね」
「…」
「で、話っていうのは？」
「お前を懲戒処分にする」
「な、なんで？」
「お前の職場での言動は、悪質極まりないパワハラだ」
「Fちゃ〜ん、ちょっと待ってよ」
「併せて、明日から人事部付とする」
「明日から、って…」
「Dの職場との接触を禁止する」
「…」
「これは、業務命令だ」
「副社長に対する、か？」
「お前が本当にそう思っているなら、おめでたい限りだが、労働契約上、お前は一社員だ」
「ずいぶん冷たいな。俺に辞めろということか？」
「そうじゃない。その逆だ。このままなら、お前の居場所がなくなる」
「そんなに迷惑なら、辞めるわ」
「ずいぶん勝手だな」
「お前だって、俺が辞めた方が、都合がいいだろ」
「おい、俺になんて言って泣きついたか覚えてるか？なんでもやるから雇ってくれって…」
「分かったよ、もういいよ」
「まぁ、気のすむようにしたらいい」
　などと言ったが、Aには別に行くあてなどあるはずもなく、明日になったら、何事もなかったかのように出社してくるに違いない。問題さえ起こさなければ、とF社長は思っている。
「D所長！」
「お、おはよう…」
「D所長、顔色が…」
「いや、もう何でもない」
「大丈夫ですか？」
「大、…大丈夫。ところで、えーっと、Aさんは…」
「異動のようです。人事から所長あてに、これが…」
　ファクシミリを見る目が、異動先で留まった。人事部付き…やはりAは要注意の危険人物だったのか…Dは思わずブルっと身震いをした。
「でも、Aがいなくなって良かった」
　Bが思わず発した一言に、Dが敏感に反応した。
「滅多なことを口にするな」
「ですが、みんなも…」
「Aのことは口にしないでくれ！」
「…」
「ご、ごめん…」
「ただ、私はAさんから懲戒処分だと言われたままで…」
「人事に聞いてくれ…」
　Dはこれ以上この場にいることが耐えられず、どこかに消えてしまった。
　仕方なくBは人事に電話をした。
「あの、G営業所のBと言います…」
「B…、G営業所のB！？おい、Bといったな。俺は貴様のおかげで…」
　Aの怒鳴り声を聞いたE人事部長が驚いて飛び込んできた。
「Aさん、ちょっと冷静に…」
　顔を紅潮させ、唇をわなわなと震わせているAから受話器を奪い取ると、Eが話を引き取った。
「懲戒処分になる訳がありません」
「当然だ、早く俺を無罪放免…」
「あなたのことではありません」
「チェッ…クソ！Bのやつ…」
「今後は電話も出ないでください！」
　人事から、処分などありえないと言われ、Bはすっきりした。電話の顛末を面白おかしく同僚と話していると、珍しくD所長が割って入ってきた。
「Aが電話に出たって？」
「はい。相変わらず怒鳴ってました」
「何て、言われた？」
「貴様…とか。でも人事部長に怒られてましたよ。本当にバカですね」
「き、君はAの正体を知らないから」
　Dの顔は青ざめていた。

当事者の真意を読み取り、問題に対する認識のギャップを埋め、話をつなぐ
オフィスハラダの
「社外相談窓口」
https://officeharada.org/helpline/

　オフィスハラダが運営するハラスメント相談窓口は、開設以来十数年、年間千件を超える相談対応実績があります。ご相談内容は、ハラスメントに限らず、多方面のテーマにまたがる多岐に渡る内容ですが、いずれのご相談にも一貫して変わらない対応は、「問題の社内的解決を第一に考えたアドバイスに徹している」ということです。
　労使の対立関係を前面に押し出さず、いかにすれば平穏迅速に、問題の収束を図ることができるか、この点に最もエネルギーを注ぎます。なぜならば、問題の社内的な解決は、労使双方にとって、物心両面にわたる負担とストレスを最小限に抑える方法であり、最も望ましいものだからです。
　この相談窓口を御社の社外相談窓口としてご活用ください。詳しくはウェブで。携帯からは右のQRコードでご覧ください。

必要な時に、必要なサポートを、必要なだけ。これがオフィスハラダの
「相談顧問」
https://officeharada.org/consulting/

　人事・労務に関するお悩み・疑問をスッキリ解消します。
□労務管理の改善提案をします
□就業規則などの諸規程の作成・見直しをサポートします。
□トラブルの未然防止を図ります。
□万が一の問題発生時には、平穏迅速な解決を促進します。
「今すぐ相談したい」…下記 URL
https://officeharada.org/consulting/contact/
からすぐにご相談頂けます。初回ご相談メールは無料です。携帯からは右のQRコードでご覧ください。

「人事労務のリスク管理メモ」
記事内容についてのご意見・ご質問は
e-mail：info@officeharada.org
TEL：050-3301-6118
FAX：050-3730-4575

定期購読（無料です！）はお気軽に…
詳細は https://officeharada.org/nl/
バックナンバーも掲載中！ご覧下さい

発行：社会保険労務士オフィスハラダ